探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：三次市立布野中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
三次市立布野小学校	6	56
三次市立布野中学校	4	18

(R4.11.1現在)

１　研究の概要

（１）　研究テーマ及び研究のねらい

○テーマ　対話を通して主体的な学びを深める授業の在り方
―生活科・総合的な学習の時間における
評価の在り方に関する研究を通して―

○ねらい

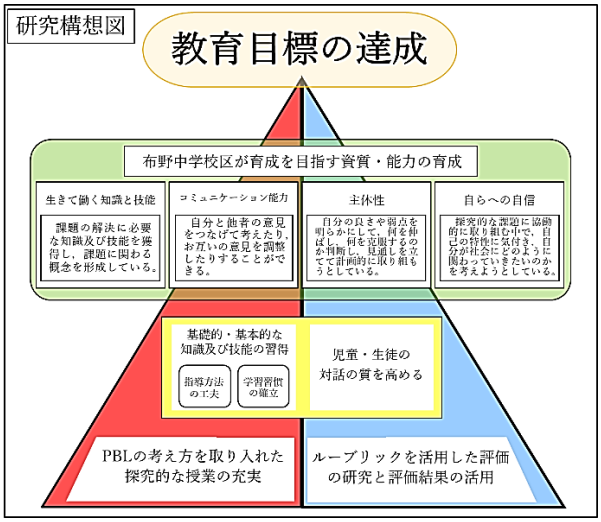
PBLの考え方を取り入れた探究的な学習を充実させるとともに，ルーブリックを活用した評価の在り方を研究して指導にいかす。また，対話についての研究を進め，児童・生徒が対話を通して主体的に課題を探究していけるようにする。これらの研究により，児童・生徒が自らの成長を実感し，本学区が育成を目指す資質・能力を高めていくことをねらいとする。

（２）　資質・能力の設定について

指導上の課題に挙げた内容を受けて，本学区が育成を目指す資質・能力(以下，資質・能力とする)を以下のように設定した。

主として対応している資質・能力	本学区が育成を目指す資質・能力
知識及び技能	生きて働く知識と技能
思考力，判断力，表現力等	コミュニケーション能力
学びに向かう力，人間性等	主体性
	自らへの自信

（３）取組について



［PBLの考え方を取り入れた探究的な授業の充実］

○布野中学校区探究活動モデルを作成して探究のイメージを全教員で共有し，各学年の実態に合わせ，地域を生かし，児童・生徒にとって魅力的で必然性のある単元を開発した。

○各学年が開発した単元を一覧化し，小中９年間を見通して，どのように資質・能力を段階的に高めていけるか検討した。

［ルーブリックを活用した評価の研究と評価結果の活用］

○ルーブリックの基本形を作成して，評価規準のイメージを全教員で共有し，各学年の実態に合わせたルーブリックを作成した。

○ルーブリックの活用について，小中それぞれで研究と実践を行った。小学校は，ルーブリックを子どもの言葉に言い換えて提示したり，教師と児童でルーブリックを作成しながら学習を進めたりすることで，自分に身に付いた資質・能力について振り返った。中学校は，指導者がルーブリックを意識しながら授業を行うことで，ねらいから逸れることがないようにし，生徒の成果物や見取りから評価を行った。今後は，各実践結果を検証し，小中共通の活用方法について研究を進めていく。

２　実践事例

○布野小学校の実践

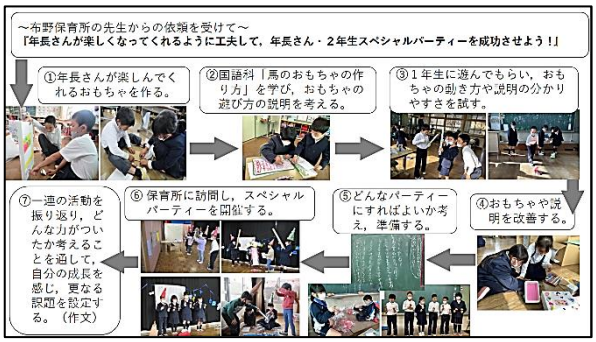
○対　象　　第２学年（１学級10名）

○単元名　　おもちゃパーティー大作せん！

○目　標

身近な材料を使っておもちゃを作る活動を通して，年長さんのことを想像し，どんな工夫が必要かを，対話をしながら試行錯誤することで，身近な人々と関わることの良さや楽しさに気付くとともに，自ら進んで触れ合い交流しようとする。

【探究的な学習の充実に向けての取り組み】



本単元は，布野保育所の先生からの「年長さんと一緒に遊んでくれる？」という依頼から始まった。「今すぐ遊びたい！」という意見が出たが，対話により意見を交わす中で，「自分たちが楽しむのでは意味がない！」という発想に変わり，そこから，『どうすれば，年長さんに楽しんでもらえるかな？』を，単元を貫く問いとして探究が始まった。おもちゃを作る段階では，どんなおもちゃが作れそうかを実際に遊びながら検討し，相手を意識したおもちゃ作りを進めた。その中で，「本当にこのおもちゃで楽しんでもらえるのか？」という疑問が湧き，下学年の１年生に遊んで試してもらうことになった。１年生からは「楽しかった。」という肯定的意見ばかりであったが，本児童は，「もっと直したらよいところはないか？」という質問を投げかけ，自分たちのおもちゃの改善を図った。その後，おもちゃの改良を経て，パーティーに向けての準備について対話を通して考えていった。クリスマスソングをハンドベルで合奏すること等が決まったが，再び単元を貫く問いに返り，「聞くだけだと退屈じゃないかな？」「一緒に合奏をしたら楽しいかな？」と，次々に対話が繰り広げられた。準備・練習を経てパーティー当日は，緊張しながらも，最後までパーティーをやり終え，年長さん

と同じ目線で話をする子，年長さんに優しく声をかけたりする子など，相手を意識した行動が見られた。単元終了後に，パフォーマンス課題（作文）を実施したところ，児童の作文には，「話し合いをしながら考えたので，コミュニケーションの力がついたと思う。これからも，どんどん力をつけたい。（一部抜粋）」という表記が見られた。このような姿が他教科でも見られ，対話を通して学ぶ姿勢が高まっている。

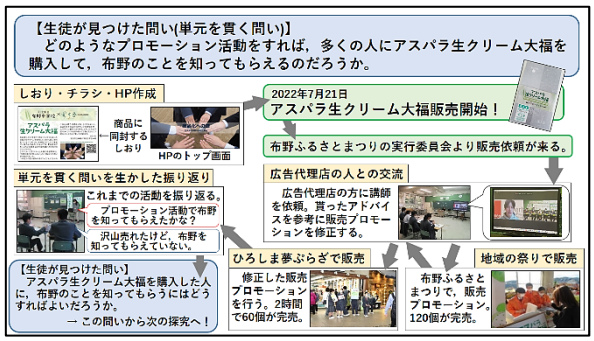
【個に応じた指導の充実】

ペアとの対話が進まず，おもちゃ作りが滞るペアがいた。理由としては，どちらかが一方的に意見を言う雰囲気になっていたからだ。そこで，生活科の授業とは別に，朝の会で質問トークを実施した。質問トークは，その日のお題について一方が話す中で，「どういう意味？」「その時どんな気持ちだった？」「何色のものだったの？」など，質問をして聞き出し，双方向が話をしたり聞いたりする活動を行った。その結果，このペアは，初めは個々でおもちゃを作っていたが，次第に「どうやったらうまく飛ぶかね？」「こうしてみる？」と対話ができるようになり，試行を重ね，おもちゃ作りに取り組むことができた。

○布野中学校の実践

○対　象　　第２学年（１学級７名）
○単元名　　学んだことを発信しよう　～プロモーション大作戦 アスパラ生クリーム大福発信中～
○目　標
多くの人にアスパラ生クリーム大福を購入してもらうために，プロモーションの方法を調べたり，地域や社会で活躍する人たちと協働しながらプロモーション活動を考案・実行したりする活動を通して，地域や社会に自分ができることを考え，行動できるようにする。

【探究的な学習の充実に向けての取り組み】



生徒たちは，小学３年生のときに地域の方に教わりながらアスパラガスの栽培を体験し，アスパラガスが布野の特産品であることを学習している。また，昨年度は小学校での学びを生かして，布野のことを多くの人に知って貰うことを目的にアスパラ大福を考案した。その企画を三次市の和洋菓子製造所である有限会社渡辺精進堂に提案し快諾され，アスパラ生クリーム大福として商品化が決定した。その際，有限会社渡辺精進堂の社長より，パッケージデザインを考えて欲しいとの依頼を受けた生徒たちは，「どのようなプロモーション活動をすれば，多くの人にアスパラ生クリーム大福を購入して，布野のことを知ってもらえるのだろうか」という問いを見出した。この問いが単元を貫く問いとなり，本年度の探究テーマは，アスパラ生クリーム大福のプロモーション活動に決まった。

生徒たちはパッケージデザインについて調べた後，各自が考えたデザインでコンペを行い，ベースとなるデザインを決定させた。その後，修正を加えて完成したデザインを提出した後，アスパラ生クリーム大福の販売にもっと貢献したいと考えた生徒たちは，有限会社渡辺精進堂に許可を取り，商品に同封するしおりや，手に取ってもらうためのチラシやHPを作成した。

アスパラ生クリーム大福の販売が開始されたある日，生徒たちに布野ふるさとまつりの実行委員会より，布野ふるさとまつりで販売をして欲しいという依頼が来たため，生徒たちは販売プロモーションについて調べ，準備を進めていった。準備を進めていく中で，生徒から販売プロモーションについて「プロの人に話を聞きたい」という声が上がり，広告代理店の方に講師を依頼し，貰ったアドバイスを参考に販売プロモーションを修正していった。

布野ふるさと祭りでの販売を終え，次に，ひろしま夢ぷらざでの販売を行うことになった生徒たちは，人通りが多い場所で効果的な販売プロモーションを行うため，広告代理店の方のアドバイスを受けながら，販売プロモーションを修正していった。

ひろしま夢ぷらざでの完売を喜ぶ生徒たちに，指導者は，単元を貫く問いをもとに活動を振り返らせた。生徒からは「沢山売れたけれど，本当に布野のことを知って貰えたのだろうか？」という新たな疑問が生まれ，「アスパラ生クリーム大福を購入した人に，布野のことを知ってもらうにはどうすればよいだろうか」という新たな問いが生まれた。探究は，今後も続いていく予定である。

【個に応じた指導の充実】

ひろしま夢ぷらざでの販売に向けて，広告代理店の方から，「商品を買ってくれた人に渡せるチラシがあるとよい」というアドバイスを受けた。チラシを担当した生徒Aは，布野町の紹介や商品開発エピソードを盛り込んだチラシを作成した。しかし，チラシを見返し，以前に作成した商品の中に入れるチラシと情報が重なっている事に気付き，どんなチラシを作成すれば良いのか悩み考え込んだ。生徒Aは理由や目的を確認して活動をしたがる性格であることから，指導者は生徒Aに，「どうして買った人にチラシを渡す必要があるのかな？」と問いかけた。その後，生徒Aは「また買いたいと思ってくれた人に価値がある情報を伝えるためのチラシを作る」という目的を設定し，広島県の地図に大まかな店舗の場所を記したり，販売店舗の情報を入れたりしてチラシを完成させた。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

○児童・生徒が，自分事として解決したいと思える課題を立て，対話を通して，「なぜだろう？」「どうすればできる？」「伝えたい！」という思いを抱き，主体的に学習を進めることができた。
○昨年度よりも，指導者のPBLの考え方を取り入れた単元の開発・実施についての理解が深まり，どの学年においても，児童・生徒が真剣に探究できるように工夫した単元を開発・実践した。

（２）課題

○児童生徒が対話を通して更に主体的に探究を進めていくために，本中学校区が共通の視点で，聴き手を育てていく。
○児童生徒の資質・能力の適切な見取りをするために，ルーブリックの妥当性や有効性を検討し，評価の更なる充実を図る。

（３）今後の改善方策等

○主体的な学びを深めるための対話について，指導者間での対話の目的を共有すると共に，「対話の質を高めるための児童生徒への支援・指導方法」に重点を置き研究を進める。
○評価について，「学区としてのルーブリックの活用方法」「評価結果をどう利用するか」に重点を置き研究を進める。